

新刀のさきがけ 堀川國廣

3月18日から5月7日までのあいだ、古河歴史博物館では堀川国広作品25点を公開する企画展を開催します。

いまだ戦乱の世がおさまらない享禄4年（1531年）、国広は、日向国古屋（現宮崎県東諸県郡綾町古屋・みやざきけんひがしもろかたぐんあやちょうふるや）に誕生。

「日州古屋之住国広作」という銘は、彼が日向国古屋の住人であることを表現するもので、はやくから国広作品は宮崎県下で高い評価を得ていました。その作品を常設陳列する綾町の歴史資料館をはじめ、関連史跡の整備や「刀工田中国広宅跡」を宮崎県史跡に指定するなど、国広は、こんにちの刀剣ブーム以前から宮崎県出身の偉人として大いに顕彰されていたようです。

ところで、なぜ古屋のような小さなまちから、新刀の祖と評されるような刀工が生まれたのでしょうか。それは、国広誕生の頃、この地域をめぐり戦乱が繰り返されていたことにほかなりません。

当時の日向国古屋は、後に飢肥（おび・日南市）城主として明治維新を迎える伊東氏の配下にありました。伊東氏は、南九州の領有をめぐって島津氏と抗争にあけくれており、名刀の需要は尽きることがなかったといっただけでしょう。

ちなみにこの「伊東氏」とは、「曾我兄弟の仇討ち」によって討ち果たされた工藤祐経（くどうすけつね）の子孫。すなわち、祐経の子孫が、伊東を名乗り日向国に勢力を伸ばして島津氏に対抗するようになったというわけです。島津氏との抗争に明け暮れる伊東氏に仕えた国広は、良質な刀が求められる環境下、作刀を続けることになりました。

さて、天正17年（1589年）頃のことですが、国広は、日州（にっしゅう）を発ち美濃にて信濃守の受領名（ずりょうめい）を受け、その後、足利（栃木県足利市）に滞在しました。そのとき足利城主長尾顕長（ながおあきなが）の依頼によって作られた刀がいわゆる「山姥切国広」であり、そのもとになった「本作長義」とともに国の重要文化財となっていることはあらためて申し上げるまでもないでしょう。

ちなみに、元和7年（1621年）8月に長尾顕長は病没、その子の宣景（のぶかげ）は、古河藩主の土井利勝に仕えて1200石の知行を与えられ、その子孫も家老を輩出するなど明治維新を迎えるまで古河藩の上級家臣としての地位を守りました。

一方、その後の国広は、京都一条堀川に転居して堀川を名乗り、弟子の育成にあたり数多の刀を生み出しています。

流浪の刀工とも称される堀川国広。伝えられている彼の一生は、虚実不明の部分が多くあるものの、国広の作刀する作品は、新刀の祖と評される名作ぞろいです。

25点もの国広作品が集まることはそうそうないこと、この機会にぜひご観覧くださいようお願いいたします。

古河歴史博物館

